

全国研修交流会 愛媛大会と山奥組

はじめに

結成5年目の若い私たちの会が、今回の全国研修交流会をお引き受けした理由は、「全国の仲間の活動状況や意見を直接伺えるチャンスである」「西予市の自然・文化・産業を理解していただきたい上で山奥組の活動を評価していただく良い機会である」と思ったからです。

前夜祭の「マ」

前夜祭では、参加者から「山奥組とはストリートな名前でない」とか、「山奥組の名前に惚れて申し込んだが、人数調整で他の分科会へ」といったお声かけをしていただき、会の正式名称は「むらの新資源研究会・山奥組」なのですが、活動内容より「山奥組」という会の名称の人氣の高さに驚きました。

また「お楽しみ抽選会」では、私が「山

の幸である乾燥シイタケ+

酒の肴に最高の〇〇の肉を

加工したハムの詰め合わせ

です」と景品を紹介し、当

選した男性に景品を渡した

ところ、その

方がそつと私の耳元で、「〇〇は猪の肉でしよう? 私の地域でも猪には困っているんです」と囁いていただき、その後意見交換を行いました。

このように、前夜祭での交流を通して、会に対する客観的な評価をいただくとともに、全国の仲間と「連帯感」を感じ取れたことが一番の収穫だったように思います。



むらの新資源研究会
山奥組
会長 萩野 久利



前夜祭にて山奥組を紹介

分科会パート1

分科会パート1では、主催者挨拶、別宮副市長の歓迎挨拶に続き、山奥組の活動状況について次のとおり報告しました。

第1部会「環境・生物資源」

自然観察会や巨樹調査、また自然林2haを借り受けて「里山保全・自然環境学習林」として保全と活用に努めています。これらの成果を『野村の巨樹』『十文田の森の植物』の冊子にまとめ発刊しました。

第2部会「地域農業・農産加工」

今年、全国的に話題になったものに「ふるさと納税制度」と「食の安全」がありま



「十文田の森」にて里山保全の現地研修

す。当会では結成当初から「農山村の再生や都市の人々の協力なしでは不可能」と考え、新鮮で安全な農産物の販売を通じて、都市と農村が共に支え合う関係（納税制度とは形は違いますが）を呼びかけ、その体制づくりに努めています。

第3部会「伝統文化・伝承技術」

竹細工・竹工芸教室を開催して伝統技術の継承に努める一方、地域の行事や伝統文化・自然を素材とした山奥組のカレンダー製作に取り組んでいます。

第4部会「交流・人材育成」

Uターン等に備えて空き家を一軒借り受け、農業・農村体験の宿泊や交流の場として活用しています。

その他、野村シルク博物館による事例発表を行った後（有）邑都計画研究所の前田眞氏をコーディネーターとして、報告に対する質疑と意見交換を行いました。

参加者からは、「どうすれば女性の参加者を増やせるか」「都市との交流をどう進めるか」「経済・収益面での具体的な活動方法は？」など、活発な意見が出されました。これらの意見の多くは山奥組が抱えている課題でもあり、特に女性の参加など大変参考となりました。

夜なべ談議

夜なべ談議では、シシ肉の燻製を肴にどぶろくを酌み交わし、和やかな雰囲気の中で、お楽しみ抽選や相互の情報発信・地域PRなど、交流の輪が広がりました。この輪が絆となり、各地で大きく花開くことを願っています。



盛会だった交流会～夜なべ談議

分科会パートII

分科会パートIIでは、「西予市の限界集落の状況と課題」の報告を受けて意見交換をしました。「限界集落で何に困っているのか？」との問いに対し、「集落の運営が困難」、「後継者がいない」、「耕作放棄地が増大」、「夢や希望がなくなっている」といった意見や、「住民の自治意識が大切、若い世代との交流や若者の活動が大切、若い世代との交流や若者の活動が大切」などの意見が出されました。

意見交換のまとめとして、コーディネーターの前田氏から、「限界集落は年齢ではなく心の問題で、その定義は自分たちが決めるものだ」「皆が共通目標を持って、自分たちがやれること、やれた

いことを探す必要がある」との提言があり、参加者全員で課題認識の共有化を図ることができました。



分科会コーディネーターによる意見交換

研修交流会の成果と今後の取り組み

今回の全国研修交流会を通して、山奥組では、これまでの5年間の活動を振り返り、その歩みを整理して今後の取り組みを考えるよい契機となりました。

地域づくり活動においては、各地域のおかれた環境と状況の中で、そこに暮らす人々自身が考え、話し合い、行動する、その仕組みづくりが重要です。山奥組では、今回の大会で得られた全国の仲間との交流と情報交換を大切に、お互いに刺激し合いながら、「地域の主体性と人育て」をベースとする地道な地域づくりに挑戦し続けたいと思います。